

精神障害者から  
見た人々

広田和子 精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

Vol.9

大阪市／新聞記者 安東義隆さん(42歳)

「フジ(テレビ)、産経、週刊新潮には近づく」と精神保健福祉業界の人から教えられていた。これらのマスコミは精神障害者にとって、とても厳しい報道をしているという理由からだという。しかし私は、98(平10)年に事件記事で容疑者の精神科通院歴を出していた産経新聞横浜版を読んで、横浜支局へ電話を入れた。電話に出たA君は「会いたい…」と言ったので、「ちゃんこ鍋」を食べながら意見交換した。

数日後、A君から電話が入り、「…広田さんの話を当直日誌に書いたらすくから『コラム記事にするよ』言われたので書きたい」と言われ、私は了解した。記事の見出しは「精神障害者と報道」で、「病歴を書けば、読者に『精神障害者はみんな怖い』という偏見を植え付けるおそれがある」との内容も載った。

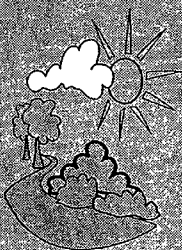
A君はNHKの記者に転職したが、デスクのBさんとの交流が始まった。それはこの年に横浜市で相手が殺され、容疑者のCさんが精神障害者だったことによる。当時、横浜市精神保健福祉課長の森さんより「…Cが精神障害者手帳○級を持っていることを産経が書くと言ってるんだけど…」という電話を受けた。そこで私はBさんに電話で「…Cさんが手帳を持っていることを書かないでほしい。精神障害者全体の社会参加が遅れるから」と言った。Bさんは「では、広田さんのコメントを…」と答えた。

こうして私は取材に来たDさんに横浜地検の起訴を支持する「被害者や容疑者本人、そして他の障害者のためにも裁判で事実を明らかに…」という長いコメントをして「載る前に知らせてほしい」と言った。12月26日夜、緊張した声でコメントを読んだD記者は「私の名前も出ます」と言ったので、「私も身体を張って出るのよ。いい記事を期待してるから」と私は言った。

C容疑者あすにも起訴を」という見出しの11段にもおよび犯行から起訴までの経過を書いたこの記事は産経新聞社社会部長賞を受賞した。翌99(平11)年7月23日に全日空ハイジャック事件が起きて3日後、東京本社社会部に転勤していたBさんより「明日から全日空ハイジャック事件を实名報道しますのでコメントを…」と依頼されたが、お断りした。

その秋、安東さんより「実はハイジャック事件の实名報道を選択したことで連載記事を書くので取材したいのですが、うちのBや業界の人たちに紹介されて…」という電話を受けて、横浜で会った。その時点で安東さんがすでに他の精神障害者取材したり、私たちの周辺をよく勉強していたのと、インタビュー記事なので記事の事前チェックができるということで次回に取材を受けることを約束して別れた。

取材は横浜で受けたが、まず精神障害者の犯罪について、犯罪の事実があれば他の疾病同様、医療的保護を受けることが大前提で、病気の特性をふまえた取り調べを受け、送検し、起訴する。報道についてはセンサーシヨナルな報道が結果的に精神障害者を医療から遠ざけてしまう場合もある。社会に望むことは、学校教育で精神の病について教えてほしい。24時間救急の整備、24時間福祉の整備などだった。11月11日、沖繩にいた私の携帯に安東さんより「記事ができたのでFAXを入れたい…」という連絡が入り、ホテルへ送ってもらったが、何の訂正も必要なかった。安東さんとの本当の交流はこれからで、いつも本音で語り合っている。



ひろたかすこ

かつて私は主治医に「文章を書くのが好き」と語っていたところ、それが病状としてとらえられていた時代もあった。インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。現在も毎日11錠の向精神薬をのまないで眠れず、のんでも音がすれば眠れないので横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。